第VI群　座長のまとめ

帝　京　大　　耳鼻咽喉科
鈴　木　淳　一

これら2つの演題は，エアロゾルの鼻内局所への到達と沈着についての工夫を扱っている。

鼻腔の形態は千差万別で，気流は，場合によっては層流になり，あるいは乱気流になると考えられる。また，副鼻腔への到達には，圧力の変化が関係すると言われている。

石塚氏らは，エアロゾル粒子にたいする工夫で，石田氏らは，鼻腔側への工夫，即ち，前者では，エアロゾル粒子の大きさや流し方，後者では，手術などによる腔の形態の変化との関係をみている。石田氏らは，沈着を促すため，粒子の表面における状況が関係するということで賦形剤の効果をみているのは興味深い。

こういった地道な努力と観察とが今日まで繰り返されてきたが，結局ネブライザー療法の方法論的評価に最終的に必要なものなのであろうと思った。優れた定量的評価方法の出現が待たれるのであろう。